

“MY TOWN” うおっちんで

歩 & 目 足 & デス ラテス

Vol.79

今治ラヂウム温泉の 不思議

〈今治市〉

岡崎 直司

タウンリズム講座主宰・
近代化遺産活用アドバイザー



浴室ドーム側から見た外観

県内でも最近の今治界限は、空前の追い風ブームであるようだ。造船やタオルが日本一なら、しまなみ海道の自転車

昨秋晴れて国登録有形文化財に選定された、この男湯と女湯が二つのドーム型に設計された建築の偉容は、大島出身の材木商村上寛造氏によって大正8年に創業された。ただ、実は正確な建築年が判明しておらず、昭和2年には存在



浴室内ドーム(クリスマス時の様子)

ブルームに日本遺産となった村上海賊、加えてサツカーのFC今治や大三島における伊東建築塾の活動など。全国レベルでの建築文化という意味では、公会堂ほか丹下健三氏の作品群も特筆されるが、実はここにもう一つの魅力が追加されてイイと思っている。それが今治ラヂウム温泉である。鉄筋コンクリート造の民間建築としては、県下でも最初期に建ったのではないかと目されるこの建物の不思議に迫ってみよう。



正面側、古写真

していたという事のみ伝わっている。肝心の設計図書や、木造建築にあるような棟札の存在が無い為に、その設計者、施工会社は何れも不明である。資料が無い訳は、太平洋戦争の末期、未曾有の災禍となった今治空襲によって隣接した村上家も被災し、全てが焼失した事によるらしい。米軍機による空襲は、昭和20年4月26日、5月8日、8月5日、6日の計4回実施され、数百名の死者を数えた。戦後、外地から復員して来る兵隊さんたちが港に上陸して見たものは、焼け野原となり変わり果てた故郷の姿だったが、そうした中で、遠目にもこのラヂウム温泉の建物だけが建ち残り、皆それを目印に家路を急いだのだと言われる。

事実戦時には、耐火性に強い鉄筋コンクリート造である事と、当時はまだ高い建築物が少なく、見通しの良さが対象となったものか、ここには越智郷土防衛隊が置かれ、緊迫した戦時下の防空対策

拠点となった。今も二階から屋上に上がる階段の踊り場には、当時の無線機器類がそのまま置かれていてという胸に迫る小空間があり、まさに空襲警報が聞こえてくるかのようだ。そうした奇跡的に被災を免れた、地域にとつて掛け替えのない戦時遺産としての側面も合わせ持つ。

さて、外観上も独特なフォルムを見せるラヂウム温泉だが、現在見られる三角屋根の三階部分は、昭和42年の増築箇所、ホテル青雲閣が創業されてからのもの。銭湯同様に休業しているものの、今も根強いファンが居て、時折り宿泊希望の連絡が入るそうだ。何れにしても、かつての屋上はフラットになっていて、中央部の鋭角な塔屋部分や一部が残る入口の玄関底の形状など、とてもキレのある独特なスタイルが特徴となっている。ドーム周囲に配された必要以上の尖塔形状なども気になるところ。こうした建築様式については、松山在住の建築家笹木篤氏は、オランダ近代建築の父ペルラーへの影響が随所に見られると指摘しており、当時の前衛であったことが伺える。

実際に村上家には、この建物はオランダ人が造ったとされる伝承があり、資料が見つからないだけに謎が謎を呼んでいる。その意味でも、建築年の特定はとても重要で、昭和2年以前のいつ、例えばそれは大正期の何年なのか、創業時の8年なのか？ 県内で判明している鉄筋コンクリート造建築の最初期としては、かの



マーブル技法が残っていた頃の様子(浴室内入り口付近)

木子七郎が設計した萬翠荘（大正11年、国重要文化財）があり、それよりも早いか遅いかはとも重要な価値基準となる。つまりは、コンクリートという建築における新素材が地方において一般化される開花期の話である。

そもそも寛造氏は材木商で成功し、葦原でしかなかった場所に歓楽街を造り上げようと、大正期に映画館（共楽館と第二共楽館）や温泉などを興し、一帯を父京造の名から一字取って京町と名付け（今の共栄町）、一代でその夢を成し遂げた。されどもラヂウム温泉の建物は、



左官仕上げの苦心のあとを見る

築とせず、当時の最先端と思われるコンクリートで計画する。大阪にあった千人風呂に着想を得たというが、その計画を實施した設計者は果たしてオランダ人だったのか、あるいはその影響下にあった日本人か、まだ黎明期のコンクリート施工をした業者は誰だったのか、などなど謎は尽きない。

しかも、その内装は、完成時には目を見張ったであろうマーブル仕上げという、左官技術の粋を施したものである。さすがに村上海賊の血を引く寛造氏ならではと思われる進取の気性。まるでアミューズメントパークのような銭湯に映画館、人が集い楽しむ街を造りたいと願ったその心意気は、果たして今治のウォルト・ディズニーか。あるいは世界のタンゲより40年も早く今治の都市づくりを手がけた着想の凄さにも驚くのだ。知られざるこうした人物の輩出が、やがて今日の当地における上げ潮ムードにも水面下ではつながっている気がするのだった。